

# 郊外ロードサイトの飲食店経営における 立地特性と商品の持つ普遍性の関係分析

町田 典秀

第1章では、本論文の作成における研究の目的と問題意識を述べる。本論文では、郊外における偏在的な飲食店の新規出店に対して、既存の飲食店の顧客層を分析することでの可能性を示すことが研究の目的である。また、既存の研究では、都市部での飲食店経営を想定した立地指南をしていること、その立地に存在している主な顧客層に合わせた飲食店経営を当たり前としていることを問題意識としている。

第2章では、立地戦略が飲食店経営には欠かせないとされている理由を紹介する。第1節では本研究で取り扱う「立地」を定義付ける。第2節では、既存の研究で述べられている立地戦略の問題点を指摘し、第3節では、本論文で中心的に扱う郊外ロードサイド立地について説明する。

第3章では、各飲食店が業種ごとにみせる顧客層の違いを、既存調査の飲食店利用率の標準偏差の大小によって普遍的・偏在的の2通りに分類する。第1節では、2次データである飲食店利用動向調査の概要説明をおこない、第2節では、前節で用いた2次データの中から利用率を使用して標準偏差を算出した結果を載せ、普遍的・偏在的に分類された飲食店についての説明をしている。

第4章では、第2章の立地に対する既存研究と、第3章の自分で得た分析結果を下に、郊外ロードサイドといった立地における偏在的な飲食店の出店に対する仮説を2つ立案した。

「Ⅰ 郊外ロードサイドでは、偏在的な飲食チェーン店は出店しえないのではないか」「Ⅱ 郊外ロードサイドに出店している偏在的な個人飲食店の客層は、普遍的になる傾向にあるのではないか」である。Ⅰについては、飲食チェーン店は立地選択戦略によって出店をおこなっているため、自店の顧客層に適応しない立地に出店することは有り得ないといった研究結果から立案した。Ⅱの仮説は、立地適応・立地選択戦略のどちらかを取った個人飲食店が、自店の顧客層に適応していない立地に出店した場合、立地特性の影響を強く受けてしまうのではないかと考えたものである。

第5章では、仮説検証のためのFW調査の結果公表とその分析をおこなう。第1節では、郊外ロードサイドにおける偏在的な飲食店の出店構成を把握することで仮説検証をおこなう。第2節では、前節の郊外ロードサイドの中から、普遍的飲食店と偏在的な飲食店の2店舗を取り上げて客数カウント調査をおこなう。その調査結果を下に、都市部・郊外における飲食店の平均的な客層と郊外ロードサイド店舗の客層とを比較することで仮説検証に結び付ける。

第6章では、結論として郊外における偏在的な飲食店の可能性に言及する。第1節では、本論文の仮説がFW調査によって支持されたか否かを説明する。第2節では、普遍的商品を取り扱うべきとされている郊外ロードサイドにおいて、偏在的な商品を取り扱うことができるかに関して、研究結果から得られた示唆を述べる。第3節では、本研究の貢献を述べると同時に、研究の反省点と今後の課題に言及する。